私たちが介護の仕事で常に向き合う
『支援の在り方』
様々な職種が関わり、皆で考え、共通の認識を図って支援に携わる『チームケア』こそが、質の高いサービスに繋がるものだと考えています。
私たちにとって「事例研究発表会」は、その目的に向けた貴重な取り組みになっています。

中野区福祉サービス事業団便り

事例研究発表会開催！

2021. 11. 18

私たちが大切にすべきこと

～ご利用者が主体であるということ～

デイサービス事例研究発表

今回の事例研究のテーマは「傾眠が見られる発語の少ない利用者へのアプローチ」と題して、2ヶ月の研究期間を設けて取り組みました。

私たちが考えたアプローチ方法は、「こまめな声掛けで発語と覚醒を促す」という内容です。一見、当たり前の対応と考えがちですが、このアプローチ方法が実は根拠に基づいた対応かは明確でないこともある為、「根拠に基づくケア」に着目し、改めて取り組みました。

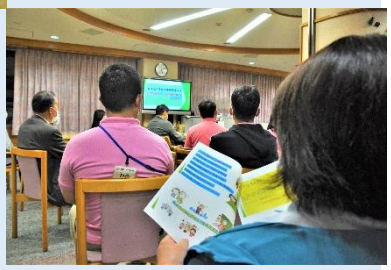
取り組みの内容は、ご本人を『知る』ためのアセスメントから始め、そのアセスメントを基に、声掛けの内容や活動内容などを検討、実施をし、その経過を記録や職員会議等で共有、ご本人の変化を把握していきました。

研究期間を通しては、根拠に基づいた声掛けや活動プログラムの提供等が脳活性を促し、表情や意欲的感情、歩行状態の改善にまでも繋げられたことに気づくことができました。また、利用者の変化に限らず、職員の意識も変化したことは大きな成果だったと感じています。

ショートステイ事例研究発表

自法人のショートステイにおいては、事業の重点目標として「選ばれるショートステイ」を掲げています。この重点目標を念頭に、今回の事例研究のテーマを「活動の充実による利用者の様子とその変化」とし、取り組みました。

まずは、職員間で取り組む目的の共通認識を図る為、「活動の目的」や「認知症の方への効果」「効果的な活動の内容」等を皆で考える機会を作りました。



その後、実際の活動では、「足浴」「園芸活動」「お菓子作り」「しらさぎ café（コーヒードリップ）」や、デジタル環境を活用した「YouTube 体操」「Google マップ回想法」等、これまでの活動を更に充実させたり、新たな活動も工夫を凝らし取り入れました。

取り組みを通して、事例研究に係った職員からは、「利用者が楽しめる活動の提供は、認知症の周辺症状の緩和にも繋がり、大きな意義を改めて感じられた」「職員自身も活動を楽しむことで、利用者にも伝わり、沢山の笑顔を引き出すことが出来た」等、利用者に限らず、職員の考え方にも変化を感じる事ができました。今後もこの取り組みを継続し、「選ばれるショートステイ」を目指していきます！

特別養護老人ホーム事例研究発表①

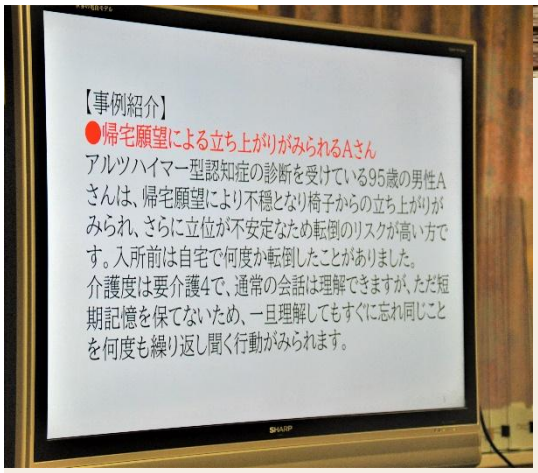
テーマ
スピーチロック０(ゼロ)を目指して！

スピーチロックとは、人の意思・意欲に対して、否定的な言葉（「～してはダメです」「～だから座っていてください」等）で遮ることで、サービスを提供する上で、相応しい言葉掛けではありません。

今回の事例研究では、このことをテーマに掲げ、「個人の尊厳を大切にしたケアの提供」「行動意欲の低下・症状悪化の防止」「活発なコミュニケーションが取れる環境」との目的に対して、「否定的な言葉を使わないことで利用者の表情や言動・行動に変化が見られる」「否定的な言葉が減ること、意見が言いやすい環境になる」という仮説を立てました。

具体的な取り組みは、①スピーチロックについての勉強会を開催②禁止用語の設定（それらに換わる用語の共有）③スピーチロック～いいね！成績表～のフロアー掲示④利用者・職員の聞き取り調査（毎月）の実施でした。

以上の取り組みを通しては、仮説に近い結果を得ることができましたが、加えて継続していくことの重要性も感じることができました。



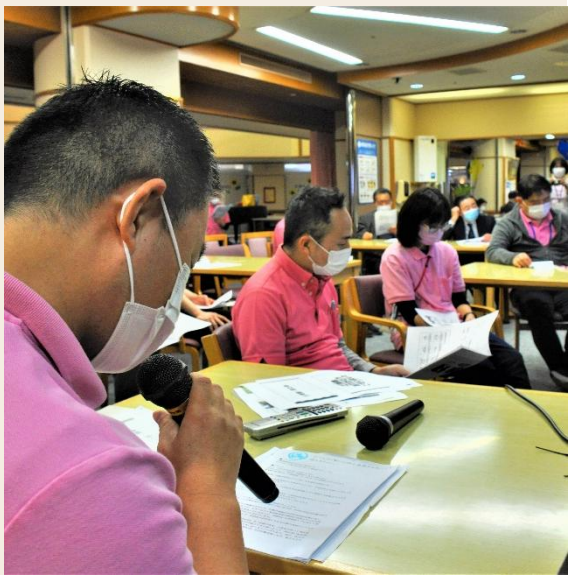
特別養護老人ホーム事例研究発表②

テーマ
行動分析を活用した認知症ケア（*BPSD* 改善への取組）

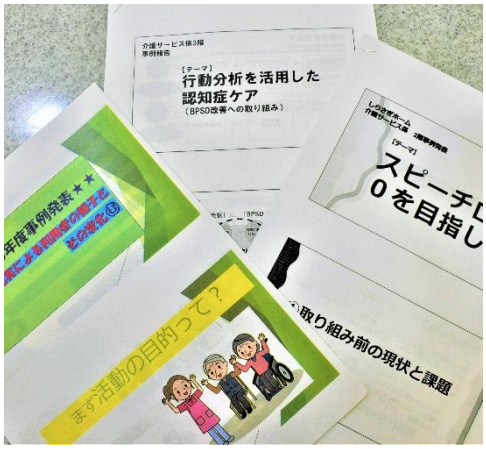
BPSD とは「行動・心理症状」を指すもので、周辺症状とも呼ばれます。認知症の症状には、「中核症状」と「BPSD（行動・心理症状）」があり、BPSD は、中核症状に付随して発生する二次的な症状となります。BPSD へ効果的な対応を行うことができれば認知症ケアの改善に大きく役立ちます。

今回の事例研究では、BPSD（帰宅願望）のあるご利用者を対象に、①介助者が認知症を理解する②利用者を理解する③根拠に基づいた対応を行う、3 つの視点で取り組みました。

①については、認知症ケアに関する勉強会等を開催、②については、家族や他サービス提供事業者、多職種職員からのヒアリングを実施、③については、一定期間行動分析を行い、工夫を凝らした「ホテル宿泊カード」等を用いて、不安軽減等から BPSD 改善を図りました。この取り組みは現在も継続中です。



事例研究発表会を通して私たちが得たもの



今回の事例研究発表会を通しては、常に向上心を持って取り組む姿勢が大切であることを改めて感じることができました。

職員間の情報共有や問題解決に向けた検討、より良い介護課程の実践に向けて考え、協議していく場にもなりました。

探求心無くして サービスの向上はなし

私たちは、「なぜ」「どうして」「これで良いか」など、常に提供するサービスを振り返りながら、ご利用者を支援しています。この探求心が無ければ、質の高いサービスに繋げていくことはできないと考えています。だからこそ、皆で、多職種で、検討する場が大切なのです。

チーム力の強化に繋げる

私たちが、サービスの質の向上について考える時、前提とすることは「ご利用者主体のケア」であることです。ケアの原理・原則でもあり、本質であるとも言えます。このことで欠かせないのが、『チームケア』であり、チームの人材（多職種）がそれぞれの専門性をより発揮できるような仕組みや業務改善を図ることが大切です。

その上で、このような事例研究発表会は、専門性を高める職員育成の場となり、また職員間コミュニケーションの活性化にも繋がっています。そしてチーム力の強化こそが、その人らしい支援に繋がる大きな手段であることも改めて感じることができる良い機会となりました。

答え合わせを するものではない

どのようなケアも答えは一つではありません。その人らしく生活できるための支援は、一つの方法を見出すのではなく、多様性を重視して考えていく必要があるのだと思います。だからこそ、チームで係ることが大切なのでしょう。

~今回の事例研究を中心になって取り組み、発表をした介護スタッフ~

すべてはご利用者の 笑顔に繋げるため

私たちが忙しい仕事の合間でこのような事例研究に取り組むのは、その結果が努力を通して自分たちのスキルとして返ってくるからです。それは、必然的にご利用者の笑顔にも繋がるのだと思っています。

「私たちの笑顔が
ご利用者の笑顔になる」